第 59 号
(年４回発行)
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

二〇一四(平成26)年度 卒業式式辞

「整理、整頓、清潔、清掃」

学長　吉岡　利忠

弘前学院大学二〇一四（平成26）年度の（文学部41回生、社会福祉学部13回生、看護学部7回生ならびに大学院社会福祉学研究科修士課程11回生、大学院文学部修士課程9回生）の学位記授与式が挙行されました。

ここに総勢一五六名の皆さまが弘前学院大学から卒業・修了して行きます。この中には、大学院を修了しました文学研究科の2名も含まれます。大学院修士号を頂いた皆さまは、日頃の仕事や教育活動などで多忙の中、また遠い地から大学に通い、大学院の授業のみならず修士論文作成に多くの時間を費やし主査、副査の先生方の評価を頂きました。この度、大学を卒業する皆さんも、それ以上の知識や技能を学ぶ必要性に迫られた時には大学院への門を叩いて下さい。

先ず、誇れることでありますが、本学卒業生の就職率はほぼ100％でここ数年推移しております。地元に根付いた大学としてこの地域へ就職する卒業生が少なくありません。ご来賓の方々に感謝申し上げたいと存じます。卒業生の皆さまには今後さまざまな分野での活躍が期待されており、嬉しい限りでございます。

多くの会社や仕事場や事業所では、そこで働く人たちのための標語・信条・精神とも言うべき「整理、整頓、清潔、清掃」という額が掛けてあります。このことについてお話ししたいと思います。

その前に、会社や仕事場ではそれぞれが目指すべき特徴ある基本理念を掲げておりますが、これはそこで働く人たちがその理念に沿って毎日の仕事に励もうとするものであります。それと同じように、教育機関では建学の精神、スクールモットーがあり、私どもの大学では「畏神愛人」です。神を畏れ人を愛する、この精神を基本にして教育・実習などが行われました。弘前学院大学で学んだ皆さまもこの精神が自然と身に付いております。社会に出ても、この崇高な建学の精神を持ち続け、そしてこれからスタートする仕事場においてはそれぞれの基本理念をしっかりと抱き過ごして欲しいものです。

これに対して「せいり、せいとん、せいけつ、せいそう」は働く人たちの職場における必要な姿勢・態度です。このフレーズ、その意味は簡単に理解できます。しかも語呂が良い響きの標語です。頭にも焼き込まれいつでもどこでも諳(そらんじる)ことができます。この４つの語句にもう一つ、躾、しつけ、を加えそれぞれの頭文字を取って５Ｓと言っております。躾という漢字は、み(身)へんに美しい、からだを美しく飾る、それと同時にこころも美しく装うことでしょう。他の４つの語句は、自ら率先して行うこと、実行することであり躾とは少々意味合いが違うと思いますが、５Ｓとして覚えておくことも良いでしょう。この躾の代わりに「習慣」を置き換える場合もあります。

働く場所では、さまざまなところに危険・障害が隠れています。一般に作業環境と言われるものです。工場などの現場はもちろんのことデスクワークが主となる職場でもさまざまな危険が見え隠れしています。そこで「整理・整頓・清潔・清掃」の標語が重要になってきますし、それを忠実に行動に移すことが大切であろうと思われます。

本来、働く人たちには十分な広さの仕事場・オフィスが理想的でしょう。その中では、４Ｓを進めるにはそれほど難儀ではなさそうです。安全で安心しながら働きやすい環境を創造することができます。仕事場・オフィスに限らず家庭においても広いスペースの空間は極めて望ましいものであります。風通しが良くなります。風が通ることは空気の淀みはなくなるし、腐ることもなく、そこに住んでいる方々は病に陥ることも少ないと言われております。人間関係においても広い空間であると良好なコミュニケーションが取れると言います。その反対に狭い空間だとどうしても深く絡み合うことになり鬱陶しくなることもありそうです。近すぎるとお互いに見なくても良い所が見えてしまい、ギスギスした関係になるようです。

そうは言うものの、現実として、多くの場合、広いスペース内で働いている、住んでいるわけではありません。そこで、「整理・整頓・清潔・清掃」です。家庭においてでもそうです。狭いスペースを極力広く活用することがこの４Ｓで確立されます。床や廊下は歩くところで物を置くところではありません。ものが積み上げられていると歩くときに危険です。また、椅子は座るもの、机は書類作成や勉強するところ、山のように物を置くところではありません。テーブルは飲食する場であり、うず高く物を置いてある状態では美味しく食事をすることさえできません。やはり、整理・整頓・清潔・清掃を心がけることが大切です。

さて、皆さまの仕事の内容から出張したり、外回りしたり、お客様と相談したり、相手方の職場環境が整理整頓されていれば、おのずから快く話しが進むことでしょう。

また、職場にあっては機械・器具・作業用具・デスク・椅子などがと無秩序・無造作に置かれていたとする場合、いわゆる作業環境の良し悪しで働く人たちの健康管理にも問題が生じます。しつこいようですが、常に４Ｓあるいは５Ｓを念頭においてください。

近年の私たちを取り巻く環境は激変し極めて複雑になりました。その中で心身の健康を維持していかなければなりません。職場は学校生活を終えた人たちがその後の人生を過ごすもっとも長い生活期間となります。職場では働くことによって自分を含めた家族の安定した生活の基盤をもたらすこと、職場での役割の充実感、職場における複雑な人間関係に社会人として適応していくことなど、これから皆さんにはさまざまなことが待っています。しかし、自信を持って世の中に飛び立って下さい。

さて、学校法人弘前学院は創立一二九年目に入ります。来年の十月十日には一三〇周年記念式典が予定されております。皆さんは本学の歴史と伝統のある大学に在学したことに、堂々たる誇りを持って欲しいと思います。

最後になりましたが、将来、皆さんが素晴らしい伴侶を得て、ゆくゆくは皆さんのお子様たちが弘前学院聖愛中学校・高等学校そして母校となる弘前学院大学を目指していただき、弘前学院の歴史を共に作っていただきたいものです。そのような、皆さんに愛される大学になるように私ども教職員は一丸となって素晴らしい教育環境、研究環境、運営環境を形作って行きます。以上、皆さんの前途を祝し、私の式辞といたします。

皆さまにそして全ての大学関係者に神の思し召しを。

God Bless You.

弘前学院校友会より母校援助金寄贈される

去る、二月二十七日（金）に、弘前学院校友会中田悦子会長より二〇一四年度の母校援助金30万円が寄贈されました。この援助金は毎年寄贈され、今年は、本館３２０教室の吊り天井型プロジェクター購入資金の一部として使用されます。日頃の講義や講演会などで活用されます。卒業生の皆様方の熱い援助に心から感謝申し上げます。

本多庸一とキリスト教(31)

学校法人弘前学院
理事長　阿保　邦弘
三教会同

明治四十年代の日本は、日清・日露戦を経て急速に資本主義的発展を遂げ、列強の一翼を占めるようになった。しかるに、一方で経済恐慌、大逆事件、東京の交通労働者のゼネストが起こるなど、社会不安も累積し人心の荒廃も著しい状態で、政府は人心収攬に苦慮していた。

こうした状況の下、内務次官床次竹二郎の発案によって計画されたものが「三教会同」であった。彼は、欧米では宗教が国民の精神的基調になっていることに着目し、日本でも「第一に、宗教と国家との結合を図り、宗教家をしてさらに権威あらしめ、国民一般に宗教を重んずる気風を興さしめんことを要す。第二に、各宗教家の接近をますます密ならしめ、以て時代の進運を扶翊すべき一勢力たらしむるを要す。」と考え、その具体策として神道、仏教、キリスト教の代表者を一堂に集め、その奮起を促し協調をはかろうとしたのであった。

一九一二(明治四十五)年二月二十五日、内務大臣原敬の名を以て、三教の代表者七十一人(仏教五十一、神道十三、キリスト教七)を華族会館に招待した。キリスト教代表の七人は、日本メソジスト教会監督本多庸一、日本基督教会大会議長　井深梶之助、日本組合基督教会会長　長谷川経輝、バプテスト教会牧師　千葉勇五郎、日本聖公会会長　元田作之進、カトリック司祭　本城昌平、日本ハリストス教会理事　石川喜三郎であった。主催者の政府側は、原内相、床波内務次官をはじめ、法相、海相、逓相、文相、司法、逓信、海軍各次官、以下関係各局長書記官等二十一人が出席する熱の入れ方であった。原内相は「従来人心を指導し風教を振興する上に於いて之宗教家の尽力は夙(つと)に認識しかつ深く感謝あれば、さらに世運の進歩とともに精神界の健全なる発達をはかり、社会状態の改善をなすに大いにその尽力を待つ」と述べた。翌二十六日、三教がそれぞれ独自に提出した決議案を、一教ひとりずつ選出した委員が検討修正し、(神道　金光教教監佐藤範雄、仏教　曹洞宗管長代理弘津説三、キリスト教　本多庸一)全会一致で可決した。しかし、教義が全く異なる三教をこの程度の曖昧な目的に向かって共同させようとすることには無理があり、もちろんこの集約は妥協となれ合い以外にはあり得なかった。

しかるに、「三教会同」はキリスト教にとって大きな意義があった。それは、三教の間に立ってこの会同を指導した宗教学者柿崎正治が言ったように、「今まで猜疑の目を以て疎外せられてきた基督教は、古来の宗教と相並んで認められるに至った」ことであった。またその政治的、社会的公認ということのほかに、キリスト教にとっては初めて、仏教、神道の指導者と、友誼的相互尊重の場を持ち得たことは、二十年前の「教育と宗教の衝突」論争を引き合いに出すまでもなく、大きな意義のあることであった。

「三教会同」にひき続き二月二十八日、上野精養軒に於いて宗教家、学者、教育家の大懇親会が開かれた。参加者は二百人を超え、キリスト教を代表して演説した本多先生は、「時勢を世界的に論じて一同を覚醒られた、維新以来世界文明の潮流は深く入来たれるも尚これと反行する逆流があってややもすれば表面に浮かび来るといひて、守旧の徒の咽喉を扼せられた。」短い、しかし立派な堂々たる演説であり、満座の注目を浴びたのであった。列席していた岡田哲蔵は感動的な筆致で本多の英姿を描いた。

（以下次号）

研究紹介㉙

スティグマの撲滅に向けて

社会福祉学部　助教　丸山　龍太

私が拠り所にしている学問の分野は、貧困、低所得問題を扱う公的扶助と呼ばれるものである。この公的扶助の大宗として生活保護がある。生活保護は「健康で文化的な最低限度の生活保障」を国が責任を持って行うものである。公的扶助は、社会福祉学で最も根幹の部分を担っている領域であると私は考えている。

ところで、生活保護を受給できる生活水準であるのに受給しない（できない）人はどの位いるのか。国は、現在の受給者数は生活保護を必要とする人の30％程度と試算し、複数の研究者は、９％から20％程度と試算している。共通しているのは、圧倒的多数の人が生活保護を必要とするのに受けられていないということである。イギリスやドイツでは、似たような制度を必要とする人の85～90％は受けられているというデータがある。日本は、この点で大変遅れていると言わざるを得ない。

何故、必要な時に生活保護が受けられないのか。私はこの問題をスティグマ（Stigma）という側面からアプローチしている。スティグマはもともとギリシャ語のスティックが語源であるとされ、「烙印」「汚名」「屈辱」「恥」「恥辱」「汚辱」「差別」「偏見」「暴力」等と訳されてきている。生活保護は、その他の社会福祉の制度に比べスティグマが濃厚に現れるとされている。

生活保護を申請した場合、受給が必要な状態か否か審査を受ける。最後の安全網とも呼ばれる制度であるから、この過程は避けて通れない。この審査の過程を資力調査（ミーンズ・テスト）と呼ぶ。口座の預貯金額から親族関係、就業経験等かなり細かいところまで調べられる。親族には連絡がいき、申請者を援助できないかと求められる。預貯金口座の金額や親族に自分の境遇が知られてしまうことは、申請者が「生活困窮者」であると明かす儀式になっている。運用面でも、受給者の増加に現場が対応できず、申請を抑制的にしようとする動き（申請書を渡さずに申請者を帰す等）が一部の現場で発生し、問題視されてきた。さらに保護を受けることは周りの人からは、道徳的非難として受給者への厳しい眼差しにつながりやすい。結果として、生活保護を受けることは「世間体が悪い」「恥」「肩身が狭い」等とスティグマを強めることとなってしまっている。

権利として受けられる（権利的保障）はずの制度がこのままで良いのだろうか。貧困は誰にでも起こり得る問題であるのに、権利行使の際何故、恥意識や屈辱感、肩身の狭い思いをしなければならないのだろうか。学生の頃公的扶助を学んだ時抱いた疑問は、今でもこの問題に取り組む原動力となっている。

現状はスティグマとどう向き合いながら支援を行うか。公的扶助ではこの視点が欠落し、明快な答えも導き出せていない。スティグマの完全なる定義は確立されたとはいいにくいからである。日本語訳の多様さは、この言葉が無限に拡散する用語であることを示している。「慈恵的救済から権利的保障へ」という人類が長い時間をかけ獲得した公的扶助という財産をより確かなものにする為、スティグマの実態解明及びその撲滅に向けて力を注いでいく所存である。

談話室

被災地の体験から災害看護教育を考える

看護学部　准教授　髙田まり子

私は、東日本大震災の被災地での看護教員の体験や教訓を共有し、互いに学びあうことを目的とした「東北の災害看護教育を考える会」の代表を務めている。日本の災害看護教育は、阪神淡路大震災・地下鉄サリン事件を契機に日本看護協会や日本災害看護学会などが行う看護職者に対する研修が中心であった。看護基礎教育では一部の大学で災害看護論が展開されていた。平成21年のカリキュラム改正時、多様な災害の多発に伴い統合分野に「災害看護」が設立され、全看護教育機関で災害看護が教授されるようになった。その二年後に、未曽有の地震・津波・原発事故という複合災害である東日本大震災が発生した。

被災地の看護教育機関は、学生の安否確認や、教育活動の大幅な変更を余儀なくされた。これらの問題状況には、各教育機関が個別の対応をしていたため、全体としての罹災状況や「災害看護」に関する教育体制や被災後の講義・演習などの教育内容の見直し、教育上の問題点など全体像の把握はできなかった。そこで、平成24年、研究活動等で交流のあった福島・宮城・岩手・青森県の看護大学看護専修学校の教員が中心となって、「東北の災害看護教育を考える会」を発足した。この会は、被災地で災害看護を担当する教員が、自らの体験を生の声で話し合い、お互いの教育実践の情報交換をしながら、各校にあった災害看護教育の実践のヒントを得て自ら実践し、その結果を共有することを目指している。

一年目は、東北六県の看護教育機関における災害看護教育の現状と課題について、実態調査を行い学会等で結果を報告した。今年度は「災害看護の演習を考える」をテーマに取り組んでいる。

このたび、３月14日から18日まで仙台市で行われた第３回国連防災世界会議の世界防災展のポスター展示で、復興の取り組みの一例としてこの会の活動を紹介する機会を得た。国連防災世界会議は、世界規模での様々な内容が検討されたが、防災教育や災害支援という視点から、看護学生に対する災害看護教育について多くのヒントを得ることができた。今後、大学で担当している在宅看護における災害看護の教育への取り組みに活かしていきたい。

木村紀美先生の最終講義

看護学部 教授　千葉　正司

２０１４年９月25日（木）16時から、弘前学院大学礼拝堂において、本学看護学部教授の木村紀美先生の最終講義が開催されました。会場は、吉岡学長をはじめ、看護学・卒業研究などの指導を受けた在学生（写真１）や教職員、弘前大学在職中の同僚や後輩の先生方で埋め尽くされました。

木村紀美先生は、聖路加国際病院に看護師として勤務した後、弘前大学医学部附属看護学校を卒業され、弘前大学教育学部と医学部で看護学の教育・研究に従事され、アメリカなどの大学で看護学の研修を重ね、２００５年４月に弘前学院大学に着任されました。

最終講義は、『看護職と私』と題して、木村紀美先生の辿った軌跡を話されました。セピア色の写真と記憶をたどり、北京幼稚園・平内町立山口小学校での交友関係からコミュニケーションの役割を認識され、青森市立古川中学校ではクラスの協調と英知によって、スポーツ大会の優勝を堅持するなど、非凡な才能を示されながら、天職とする看護の道に進まれました。

教育活動では、看護学生の臨地実習、医学部附属病院などでのナース院内教育を担当し、論理的思考力の育成、最新のProblem Based Learning（PBL）、Team-Based Learning（TBL）などの教育方法を普及させました。本学看護学部では、４年生を指導し、約50編の卒業論文を完成させました。

研究活動では、人工肛門患者の看護などの急性期看護に関する研究、看護教員の研究活動に関わる因子分析などを行っております。看護学教育の歴史では、高等学校衛生看護科の変遷、青森高等看護学院における花田ミキの貢献、旧制女子中等学校の看護婦養成教育などについても研究しておられます。

木村紀美先生は、著書８編、学術論文62編、学会発表１０２編の業績を残されました。日本看護協会をはじめ、多数の看護関連学会に所属し、評議員や代表の要職をつとめられ、それらの功績により、２００４年に青森県看護協会会長表彰、２００５年に青森県知事表彰を授与されました。

木村紀美先生の最終講義は、自らの論理的思考と献身的協働を貫き、先生を慕う同胞に感銘と希望を与えました。教え子のアーチをくぐる御姿（写真２）に、ご健勝とご活躍を願って止みません。

コンソ学生委員会「いしてまい」と弘前市長との懇談を通して

日本語・日本文学科　一年　三上　拓人

２月18日に弘前学院大学の第３会議室で行われた、「弘前市長と学生の放課後ミーティング」に私は、「いしてまい」の一員として参加した。まず、「いしてまい」の今年度の主な活動（地域・弘前大学のねぷたへ取材・ねぷた制作・参加、盛岡・函館での活動発表）と今年度の活動を通して来年度には改善するべきことを市長に報告した。活動報告に関しては、プレゼン形式で一人一人が参加した活動を報告する形をとった。私達６人は市長とは初めて顔を合わせるので、緊張していたが、自分達の活動を具体的に分かりやすく報告出来たので良かったと思う。市長は、この活動報告を聞いて、「皆さん、今年度は県外での活動が多いと思った。今回のミーティングは１年生がほとんどである。是非、県外の活動を活かして来年度に向けて頑張って欲しいと思っている。」と感想を述べられた。

次に行ったのが、市長との意見交換である。これは、私達６人が実際に弘前に住んでみて不便な所や改善して欲しい所を直接市長に話すというものである。意見が上がったのは、「除雪の仕方を改善して欲しい。」「街灯が少なく、夜道を歩くのに危険である。」「バスの本数や時間や料金の偏りを無くして欲しい。」というものであった。市長は、私達に、弘前が今抱えている問題とともに、この改善の事について詳しく説明してくれた。

今回の放課後ミーティングは、ただ報告や意見交換しただけではなく、私達が活動していく上で大切な事だと思う。活動報告も、ただあった事だけを話すのではなく、活動を通して何を感じたか、考えたか、という事が大事だと思っている。私は弘前にずっと住んでいるので、ここの生活に慣れている。しかし、市長との意見交換の時に、県外や市外から来た人達は弘前の事をこういうふうに思っている、と気づかされただけではなく、どうしたら改善されるのか、「いしてまい」で出来る事は何かあるのだろうかと思った。来年度は今回の放課後ミーティングも活かして活動したいと思う。

「第7回 ヒロガク福祉創造フォーラム」を終えて

社会福祉学科　三年　山川　美咲

第７回ヒロガク福祉創造フォーラムを11月９日に開催しました。このヒロガク福祉創造フォーラムは、21世紀の社会福祉を担うべく本大学社会福祉学部で学んでいる学生たちが主体となり、市民や社会福祉に携わっている専門職の方々の知恵やアドバイスをいただきながら地域の新たな福祉の創造を試みている場です。

私たちは今年度、「これって社会福祉？―社会福祉の『目』で見直してみる―」とテーマを設定し、学生が興味や関心を持った分野ごとにグループに分かれ学習をしてきました。今回の各グループの発表テーマは、少子化、ネット依存、ひきこもりでした。一見社会福祉とは関係がないのではと思う方もいるかもしれません。テーマ設定にあたっては、文献、話し合いを通して学び、社会福祉とのつながりを見出していきたいという意味をこめました。しかし、社会福祉と各グループのテーマをつなげることは容易ではなく、自分達が何を明らかにしていきたいのか方向性を決めることにも苦戦しました。そのため、何度もメンバーで話し合い、様々な考えを知り、視野を広げていくこと、多面的に物事を捉えることを大切にしてきました。仲間と同じ方向に向かって頑張ること、学生が主体となることの難しさを身をもって体験したことにより、仲間と協力することの大切さや責任を持ち行動することの重要性を改めて学びました。

フォーラム当日は、天気にも恵まれ、朝早くから多くのお客さまが来てくださいました。

まず初めに少子化グループが発表を行いました。発表したメンバーは藤田創満くん、浅利太地くん、石岡丞くんです。テーマは「少子化問題から考える社会福祉」としました。少子化が問題とされている中、子どもを増やす政策より、より質の良い政策によって子どもを大切に育てることが重要であると考察しました。今を生きる、これから生まれてくる子どもを大切に育てていくための環境、つまり、制度の強化、企業による取り組みの推進、地域の取り組みが必要不可欠だと考えました。そして家庭が必要とするものに対し、支援していくのも社会福祉士の役割の一つではないかと考えました。

次に、ネット依存グループの発表を行いました。発表したメンバーは菊池由花さん、山本明奈さん、佐藤康太郎くん、三上友莉香さんです。テーマは「中高生のコミュニケーションに関する現状と課題について考える―インターネットを中心に―」としました。インターネットの接続のし過ぎによって身体的にも精神的にも問題を抱える中高生を取り上げました。また、コミュニケーションのあり方を考え直す必要があるのではないかという問題提起をし、社会福祉でできることはないか考察しました。ネット依存という変わった視点から、社会福祉との繋がりを考えることは、福祉を学ぶ上でとても良い機会になったのではないかと思っています。

昼休憩の時間には、ワークショップ・施設販売を行い、現場の人や当事者とお話しする機会をつくりました。

最後にひきこもりグループの発表を行いました。発表したメンバーは、私と島田敦史くんです。テーマは「ひきこもりをソーシャル・インクルージョンの視点からみる」としました。

この発表では、社会的排除としてのひきこもりをとりあげ、その問題に対し、社会的包摂の役割を持つ社会福祉の分野で何ができるのか明らかにすることを目的としました。

調べていくうちに、社会の中に居場所がないと感じてしまい、自ら社会から離れていくといった意味での社会的排除が考えられるということに気づきました。必ずしも排除する側、される側も排除という意識を持っているわけではないが、気が付かないうちに双方の敷居は高くなっているのではないかと考察しました。

ひきこもりの〇〇さんではなく、本人を見つめ、価値観・性格・意志を尊重した関わりをすることは大切なことであり、社会福祉の分野が率先するべきであると考えました。ひきこもっている本人だけに問題があるという訳ではなく、社会的排除という社会のプロセスにも問題があるということを踏まえ、地域の人とのつながりの大切さや、ひきこもりも社会の一員であるということを伝えていければと発表しました。

私は大学に入ってから、仲間と協力し、物事を成し遂げる機会が減ったように思っていました。しかし、フォーラムに携わったことにより、大変なことがあったとしても、最後まで仲間と協力しやり遂げる達成感を得ることができました。楽しいことばかりでなく、つらいことがあったからこそ私にとって忘れられない貴重な経験になりました。

本番を迎えることができたのは、私たち学生の力だけではありません。厚くご指導くださった玉井さんや先生方、先輩方がいたからです。ときには、厳しい言葉もありましたが、最後には必ず暖かい言葉をかけてくださったことが本当に支えになりました。そして、当日ボランティアの方々、事務職員の方々、地域の方々、皆様の支えがあったからこそ苦悩を乗り越えることができました。本当にありがとうございました。

フォーラムを終えたことに決して満足せず、これからも社会福祉を担う者として日々学習していきたいと思います。

「第三回就活祭」報告

第三回就活祭（文学部・社会福祉学部四年生の就職内定者による就職活動報告会）をクリスマスイブの十二月二十四日(水)に本学の一一五教室において実施した。

実施形態は、四年生が一人ずつ一方的に就職内定に至る話を参加三年生にするのではなく、四年生が各内定先の事業所のブースを設け、三年生が希望のブースに出かけ、お互いにディスカッションをしながら就職内定に至るまでの活動を三年生が知る方法である。

今回のブースは、十四箇所設けたが、一般企業・福祉施設・銀行・警察・市役所・教員など幅広い職種に及んだ。

この就活祭を通して三年生はこれから本格化する就職活動への道標として、四年生は社会人としての自覚を養う大きな機会を得たものと確信している。

（就職課）

ソウル神学大学校の教員と学生の表敬訪問

宗教主任　楊　尚　眞

２月25日から27日にかけて、韓国姉妹校であるソウル神学大学校のキリスト教教育学専攻の学生８人とキリスト教教育科学科長の兪在徳教授が研修旅行のため青森に滞在したが、26日、本学に表敬訪問した。今回の研修旅行の目的は、日本の宗教と文化を学ぶこととして、２つの特別講義(楊尚眞教授による「日本の宗教と歴史・神道・仏教・キリスト教」と笹森建英客員教授による「青森県の土俗信仰」)を受けた。学生たちからの活発な質疑があり、有意義な学びと交流のひと時をもつことができた。

野外学習としてキリスト教会、神社、お寺、ホテルの神前式とチャペル式の結婚式場、火葬場などを訪問した。また、南田温泉アップルランドで二泊しながら日本の料理を味わい、市内の食堂での昼食として日本のとんかつやラーメンを食べ、そのおいしさに感嘆した。ソウル神学大学校の所在する富川市は全く雪の積もらない都市であるため、青森滞在中に雪に覆われた景色にとても魅了し、まさに夢の中の研修旅行であるとの感想であった。ほとんどの学生が初めての外国旅行であったので、この研修旅行は、彼らにとってとても衝撃的な体験であったが、青森の素晴らしさを色々な面で感じ取って頂けたと思われる。兪教授は、毎年、青森においての研修旅行を企画したいと言われた。これから、益々、本学とソウル神学大学校との交流が発展することを祈りたい。

社会福祉士・精神保健福祉士養成校成績優秀者表彰される

この度、二〇一四(平成二十六)年度の成績優秀者が決まり、三月二十日に表彰状の授与が卒業式後に行われました。

この賞は、学業成績・人物ともに優秀で、社会福祉士・精神保健福祉士養成校の養成課程修了者に対し贈られるものです。

日本社会福祉士養成校協会成績優秀表彰者は、佐藤唯香さん、日本精神保健福祉士養成校協会成績優秀表彰者は、渡辺佳央里さんです。

2015年度

弘前学院大学独自の企業・病院・施設説明会

＊文学部・社会福祉学部学内就職セミナー

2015年 5月9日(土)

午後1時～ 4時

＊看護学部学内就職セミナー

2015年5月23日(土)

午後1時～ 4時

場所：両日ともに弘前学院大学体育館

合同就職委員会

2014年度　理事長賞授与者

文学部　英　語・英米文学科　川村　美咲（青森県立木造高校卒）
日本語・日本文学科　後藤真妙子（青森県立弘前中央高校卒）
社会福祉学部・社会福祉学科　工藤　鮎子（弘前学院聖愛高校卒）
看護学部・看護学科　今野紗耶香（福島県立橘高校卒）

大学生活を振り返って

文学部　英語・英米文学科卒　川村　美咲

入学した二〇一一年は東日本大震災があった年でした。入学式の直後に行われた一年生のリトリートでは夜に大きな余震があり、停電したことを覚えています。震災を思い出し、とても不安になりましたが、同じ部屋の仲間との会話が私を和ませてくれました。リトリートを通して、仲間の大切さを実感し、私にとって忘れることのできない大学生活のスタートとなりました。

私が大学生活で最も力を入れて取り組んだのは卒業論文です。初めは書き終えることができるかとても心配でしたが、研究を進めていくうちに新しい発見があり、気づくと夢中になって取り組んでいました。卒業論文を書き終えたときの達成感は忘れられません。

大学生活を振り返ってみると、良い出会いに恵まれた四年間だったと思います。仲間と過ごした日々は笑い声が絶えず、ドーナツパーティーやスポーツ大会など参加した行事は楽しかった思い出ばかりです。失敗を恐れず、積極的に行動する仲間の姿には何度も刺激を受けました。また、講義を通して様々な考え方に触れ、広い視野から物事を考える力を培いました。視野が狭かった自分に気づくことができ、自分自身を見つめ直すきっかけにもなりました。弘前学院大学でのたくさんの方々との出会いが私を成長させてくれたのだと思います。

四年間はあっという間だったように感じますが、とても充実した大学生活を送ることができました。これまで支えて下さった先生方、四年間共に過ごしてきた仲間、そしていつも温かく応援してくれた家族には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

学生生活を振り返って見て

社会福祉学部　社会福祉学科卒　工藤　鮎子

大学生活を振り返ってみるとあっという間の時間であったと思います。遅刻しそうになって走った廊下や、追い込みのテスト勉強、今となってはいい思い出です。

入学当初は将来について何も考えることができなくて、与えられたことを実行することで精一杯でした。そして、ただ何となく毎日を過ごしていました。しかしこの四年間で、どんな自分になりたいのか、将来の道を決める、そう決意していました。慣れない授業や新しい環境の中で、自分の中で何かが変わっていくような気がしました。今までは、楽しかったらいいや、自分には関係ないと、嫌なことからは逃げて、うまくいかないことは周りのせいにしてしまうこともありました。しかし、このままではいけないと強く思うようになりました。それには大きなきっかけがあったわけではありません。普段の何気ない日々を過ごしているうちに、あるときからそう思えるようになりました。それからの大学生活では、避けてきたものに、積極的に取り組むことが私の目標となりました。そして、ヒロガク福祉創造フォーラムや社会福祉援助実習、精神保健福祉実習などの学校内だけではなく、アルバイトや社会人バスケットボールなど、今の自分にしかできないことを一生懸命に取り組むことができたと思います。そこには、四年間を共に過ごした仲間や、相談に乗ってくださった先生方、地域の方々、そして家族などの多くの支えがありました。本当にありがとうございました。そしてこの出会いに感謝の気持ちでいっぱいです。

大学生活を送れたこと、卒業を迎えることができたこと、叶えたい夢を持てたこと、たくさんの方々に支えられて素敵な毎日を過ごすことができました。周りへの感謝の気持ちを忘れずに、自分自身と向き合い、一歩ずつ前に進んでいきたいです。この大学生活は私にとって大切な宝物となりました。四年間本当にありがとうございました。

手帳と私

文学部　日本語・日本文学科卒　後藤真妙子

私の大学生活のマストアイテムは、なんといっても「手帳」です。高校時代までの私は、新年に気合を入れて大きな手帳にし、今年はたくさん書くぞと意気込んでも、三日坊主のスカスカのままで終わることが多々ありました。そんな反省から、大学一年時に使った手帳は、手のひらサイズで厚さが一センチもない小さな手帳でした。それが大学二年時には文庫本サイズの薄い手帳になり、月間カレンダーだけでなく週間ダイアリーがあるものになりました。大学三年時にはさらに使いやすさを求めて、よく売れているらしい手帳を使ってみました。そして、大学四年時には日間ダイアリー付きの分厚い手帳になりました。

今、手元にこの四冊の手帳があります。部活（華道部）に入り、アルバイトを始め、様々な活動に参加するようになり…ページは学年が上がる毎に埋まっていきました。予定やTODOリスト、学業に関するメモだけではなく、アルバイト（塾講師）の授業研究メモ、遊びに行った時の感想メモ、資格試験勉強のノート替わりにと、思いついた事を一冊の手帳に何でも書きなぐりました。一部は就活の面接ネタにもなったり、卒論を書いている時には、思考の道筋をつけてくれたりもしました。

四年間、色々な事がありました。沢山の人と出会い、様々な経験をし、これまでの自分の人生の中で一番充実した学生生活を過ごすことができたと思っています。この手帳四冊分の記憶が、私の大学四年間のかけがえのない思い出です。

手帳はもはや私の生活に無くてはならないものになりました。今年も新しい手帳を買い、公務員としての新生活でどのように埋まっていくのか、今からワクワクしています。

最後に…聴覚障害を持つ私に対して多くのサポートをしてくださった先生方、同級生、先輩や後輩、事務、就職課の皆様に心から感謝しています。ありがとうございました。

祝卒業

私の四年間

看護学部　看護学科卒　今野紗耶香

入学した日から四年の月日が瞬く間に過ぎていきました。四年前、新しい生活に大きな期待と不安を抱きながら入学式を迎えたことを今でも覚えています。

この四年間を振り返ると、本当に様々なことがありました。入学当初は自分で科目を選択し、自由な席に座り講義を受けるということがとても新鮮に感じられました。また、学ぶことの多さに戸惑ったこともありました。しかし、友人たちと協力し合いながら学び、乗り越えてきた日々が懐かしく思い起こされます。

実習が始まると、忙しそうに動いている看護師を見て、看護師という仕事の大変さ、看護の難しさを痛感しました。しかし、忙しい中でも患者さんのことを一番に考え、わずかな変化にも気づいて声を掛けている姿を見て、とても感動したのを覚えています。同時に、患者さんのことを一生懸命考えていても、知識がなければ良い看護をすることはできないということを学びました。これまで学んできた知識や技術が、いかに大切だったかということを実感しました。しかし、事前に学習していたつもりでも思うようにいかず、悩んだこともたくさんありました。その度に、共に学んできた友人たちや先生方に支えられました。そして何より、患者さんに支えられてきたことを忘れません。自分一人ではここまで来ることはできなかったと心から思います。今では、患者さんと話すことで精一杯だった一年生の頃に比べると、少しは成長できたように思えます。

四月から、私たちはそれぞれの道を歩み始めます。これから忙しい日々が続くかもしれませんが、決して初心を忘れず、真摯に患者さんと向き合い、日々精進していきたいです。しかし、新たな環境で、時には困難にぶつかることもあると思います。そんな時も、弘前学院大学で学んだ様々なこと、そして、たくさんの人たちに支えられて乗り越えた日々を忘れず、前に進んでいきたいです。

大学院での学びを振り返って

大学院　文学研究科　小松原進三朗

大学院の二年間を振り返ると、これまで以上にしっかりと勉学に取り組めたことが実感できる。例えば、講義で学んだことを、自分の研究テーマにどう生かすかを考えられるようになった。学部生の頃は、講義で学べることはとても興味深くて面白いものの、自分の研究テーマとは関係のない知識だと考えていた。講義と課題研究は別々のものと思い込んでいた。そのせいで、どこか真剣に勉学に取り組めていなかったと思う。そして、実際に卒業論文を書き上げてみると、自分がいかに狭い範囲の知識でしかものを見ていなかったかに気付かされた。大学院の講義では、様々な知識の繋がりを感じられる瞬間がある。全く関係ないと思っていた講義の内容が、思いがけず別の講義で生かすことができたり、考えを膨らませるのに役立ったりする。どんな知識にも必ず繋がりがあるということを、改めて考えさせられた。

また、大学院では、二年間課題研究に打ち込めるという、時間の余裕もあった。学部生の頃に書いた卒業論文のことを思い起こすと、指導が始まった当初は論文の輪郭も見えず、ただ狼狽えていた。そのままの焦りと共に作業を進め、出来上がった頃には、本当に自分が目指していた形になったのか疑問を抱かずにはいられなかった。それに比べると、大学院ではきちんとした地盤を作る時間があった。先生方からも、丁寧な指導があった。その結果、納得のできる論文が書き上がったと思う。

二年間多く時間を掛けてでも、確実に学びを深め、進歩してきたという確信がある。これからも、学び続けるという姿勢を持って生きていきたい。また、今まで以上に広い視野で物事を捉え、繋がりを大切にしていきたい。これは勉学のみならず、人との付き合いにも言えることだと考える。